

1 自己評価及び第三者評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	2894200027		
法人名	医療法人社団 天馬会		
事業所名	グループホーム天馬		
所在地	兵庫県相生市旭3丁目2番18号		
自己評価作成日	平成21年9月	評価結果市町村受理日	平成22年3月26日

事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigo-kouhyou-hyogo.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2894200027&SCD=320
基本情報リンク先 (介護予防)	http://www.kaigo-kouhyou-hyogo.jp/kaigosip/infomationPublic.do?JCD=2894200027&SCD=370

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 兵庫県社会福祉協議会
所在地	兵庫県神戸市中央区坂口通2-1-18
訪問調査日	平成22年1月28日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

グループホームの理念である自己研鑽に努め、高度な知識を習得し、利用者様には信頼・家族様には安心をしていただけるようなサービスを提供して行きたい。
質の向上という点で、職員全員で取り組まないといけないことがたくさんあり、利用者様中心に日々努力を重ねていきたい。

【第三者評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

病院として建てられた5階建て建物の2階部分に、グループホームがある。周辺は商店街や住宅街である。職員全員で新しく理念として掲げた、利用者・家族への「信頼」「安心」を実践するため利用者本位のケアに取り組んでいる。利用者の暮らしの基本場面に、一人ひとりの希望やタイミングに合わせた入浴支援が行われ、また食事づくりの一連の流れに利用者が職員と共に参加し、利用者一人ひとりの好みや力を活かした支援が行われている。また、運営母体が医療機関であるので、医療面でのサポートが利用者・家族に心強い。

・サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) 項目 1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目	取り組みの成果 該当するものに印	項目	取り組みの成果 該当するものに印
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	66	職員は、生き活きと働いている (参考項目:11,12)
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごしている (参考項目:30,31)	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)		

自己評価および第三者評価結果

[セル内の改行は、(Alt+)- + (Enter+)-です。]

自己	第三者	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
理念に基づく運営					
1	(1)	<p>理念の共有と実践</p> <p>地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている</p>	<p>理念は共有空間に掲示しており、職員全員が常に理念を意識して実践にむけて日々取り組んでいる。</p>	<p>昨年夏に実施した利用者アンケートの結果等を踏まえ、より利用者本位となるよう理念をつくり変えた。その際に地域密着型サービスの意義等話し合ったが、事業所として「この地域で」という考えがベースにあったので、あえて言語化されていない。理念を職員室前等に掲示し、職員会議等で内容を話し合い、「利用者に信頼され、家族に安心される」よう、利用者への声かけ等で理念の実践に向け取り組んでいる。</p>	<p>引き続き地域密着型サービスの意義・役割等を話し合い、地域生活の継続支援と事業所と地域の関係性を明確にした理念づくりが望まれる。</p>
2	(2)	<p>事業所と地域とのつきあい</p> <p>利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している</p>	<p>散歩、買い物など外出時には積極的に挨拶や声掛けをさせて頂くように努めている。また、商店街の近くでもあり、顔なじみの方が増えてきている。</p> <p>また、民生委員の方には運営推進会議のメンバーになって頂き、ご意見を伺っている。</p>	<p>地域の秋祭りへの参加やペロン祭り見学、近くのスーパーでの食材の買い物、散歩時の挨拶等事業所自体が地域の一員として交流している。</p>	<p>利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、より一層事業所と地域の人々が日常のお互いに支え合う双方向の関係づくりに取り組むことが期待される。また、地域の清掃活動への参加等、地域が必要とされる活動や役割を担うことが期待される。</p>
3		<p>事業所の力を活かした地域貢献</p> <p>事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている</p>	<p>管理者は、認知症キャラバンメイト養成講座に参加し、ボランティアで地域に貢献させて頂くように県に登録している。</p>	/	/
4	(3)	<p>運営推進会議を活かした取り組み</p> <p>運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている</p>	<p>2ヶ月に一回定期的に開催している。家族様代表・民生委員・地域包括・市の介護保険課の方に参加して頂き、意見・要望をサービスの質の向上に生かしている。</p>	<p>利用者・家族・地域の代表、市担当職員・地域包括支援センター職員等をメンバーに2ヶ月に1回開催している。会議では利用者の状況・職員の異動・ボランティアの活動状況等について報告すると共に、レクリエーションへの事業所の取り組み等について話し合っている。また、今回の自己評価・第三者評価の結果報告を行う計画がある。「気づきノート」の作成提案等そこでの提案・助言等をサービスの向上に活かしている。</p>	
5	(4)	<p>市町村との連携</p> <p>市町村担当者とは頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる</p>	<p>行政が主催する地域の会議・研修会には積極的に参加し、質の向上と関係づくりに取り組んでいる。</p>	<p>運営推進会議に市担当者は必ず出席しており、そこで利用者の状況や事業所の取り組み状況等の情報提供を行っている。事業所の課題として利用者アンケートの結果等も報告し、市も助言を行う等課題解決に向け共に取り組んでいく姿勢がある。</p>	
6	(5)	<p>身体拘束をしないケアの実践</p> <p>代表者および全ての職員が「介指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる</p>	<p>事業所内外の研修に参加し、身体拘束を行わないことを基本としている。</p>	<p>身体拘束をしないケアを実践するため、禁止対象となる具体的な行為等について勉強会を行っている。業務内容の改善を行い、リビングでの利用者のより一層の見守りと共に、職員に担当制を採り入れる等により身体拘束をしないケアに取り組んでいる。事業所からの出入り口は3ヶ所あるが、チャイムを設置し、日中は施錠せずエレベーターも自由に使用できる。</p>	

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	(6)	虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	社内マニュアルを基に、ホーム内で勉強会を開いている。	ミーティング等で、高齢者虐待防止法等を学ぶ機会を設け、虐待の範囲・内容等の理解を深めている。管理者と職員のコミュニケーションの充実、職員の適切な休日の確保等を図り、職員のストレスや疲労による虐待の未然防止に努めている。入浴時等に体にあざがないか等に注意を払い、万が一発見した場合管理者への報告を徹底している。	
8	(7)	権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	職員全員は理解できていない。今後、研修等に参加し、全職員に還元できるように努めていきたい。	「成年後見制度」について勉強会を実施し、制度の理解に努めている。また、制度の利用について家族から相談を受け、主治医等とも話し合いながら、制度が活用できるよう支援を行っている。「日常生活自立支援事業」についてはまだ学ぶ機会を持っていないので、十分理解できていない職員もいる。	「日常生活自立支援事業」を活用している人は現在いないが、今後活用を必要とする状況が生じる可能性もあり、勉強会等で学ぶ機会を持ち、必要時には活用支援できるよう取り組むことが望まれる。
9	(8)	契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時は、一方的な説明で終わらないように、時間をかけ不安なく安心して入所していただけるように努めている。	管理者の交代があったので、現管理者が新たな契約に立ち会った事例はない。昨年加算等で料金改定を行ったが、根拠を示して説明を行っている。施設への入所等で家族から契約解除を申し入れた事例はあるが、事業所から申し入れた事例はない。	
10	(9)	運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	玄関先に苦情・相談のご意見箱を設置している。家族が面会に来られた際には職員は席を外し、職員に対しての意見や不満を言いやすい環境を作り、その後職員が家族との時間をもち、意見や要望を聞いている。	ご意見箱を家族が目につきやすい事務所に設置している。家族訪問時はまず家族と利用者のみでの面談を心がけ、職員は席を外してお互いに意見等しやすい環境をつくっている。運営推進会議には必ず家族が出席し、外部者に意見等を表している。表された意見等は、管理者・職員で、場合によっては法人事務部長を交えて、原因・対応等を話し合い、家族等に納得してもらえるよう説明している。	
11	(10)	運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月に数回ある全体会議・勉強会・ケア会議などで、職員の意見や要望を聞き、職員が発言しやすい環境を作っている。	毎月職員会議を開催し、また、毎日夕食後に管理者は職員と運営に関する提案・助言等を話し合う機会を持っている。例えば、汚物入れ・ソファやテーブルの設置場所の変更等職員からの提案を採り入れ、サービスの向上に活かしている。従来、やむを得ず法人内の異動を行っていたが、昨年秋以降、利用者や職員の馴染みの関係にも配慮し、異動は極力行っていない。異動の際には利用者への説明と挨拶を励行している。	
12		就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	勤務時間内の中で少しでも職場を離れ、休憩時間を持ち気分転換を図れるように努めている。		
13		職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	外部・内部研修に積極的に参加できるように努めている。外部研修に参加した職員はホーム内の会議で報告し、研修内容を職員全員が共有し、意見の交換ができるようにしている。		

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14			同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	他法人の同業者との職員同士の交流が少ない。		
安心と信頼に向けた関係づくりと支援						
15			初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	入所前に面接を行い、包括・センター方式の様式を使用し、本人・家族の希望を細かく記入して頂き、職員が本人の状態をよく理解できるように努めている。		
16			初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	入居に際して、家族の不安を軽減でき家族がホームに対しての要望を話して頂けるように努め、安心して利用して頂けるように心がけている。		
17			初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	入所申込を頂き、初回面接時に色々なサービスの情報を提供している。		
18			本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	センター方式などを利用し、昔ながらの馴染んだ生活・環境を大切に、利用者との日々の会話の時間を大切にしている。また、人生の先輩ということで教えて頂くこともたくさんあり、お互い支えあって生活している。		
19			本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	日々の生活の様子や職員の些細な気付きも家族に報告し、家族と職員が同じ気持ちでケアできるように協力関係を築いている。		
20	(11)		馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	昔から利用されているスーパーへ出かけた後、年賀状なども出せるようにサポートしている。	家族等から利用者がこれまでよく食事に行っていた店や買い物に行っていた馴染みの店、また、弓道の先生をして毎日曜日に練習に行っていたこと等利用者と地域社会とのつながりを把握している。馴染みのスーパーへ出かけた後、家族や友人へ年賀状が出せるよう支援しているが、馴染みの人や場所との関係性の継続に配慮した支援が十分には確保されている状況にない。	引き続き、家族や民生委員・ボランティア等地域の人達にも協力を呼びかけながら、利用者や地域社会との関わりを継続していくための取り組みが望まれる。

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価		
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容	
21			利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	一人ひとりの思いを尊重しながら、利用者同士の関係が円滑になるように職員が間に入り、お茶を飲んだり話ができるようにしている。			
22			関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービスの利用が終了された方にも気軽に立ち寄って頂けたり、相談事にも対応させていただけるような継続的な関係づくりに努めている。			
その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント							
23	(12)		思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	日々の暮らしの中の関わりにおいて、本人の発する言葉や表情を見逃さず、その人の思いや要望を把握できるように努めている。また、意思表示が困難な方には、家族からの情報を参考に少しでも以前の本人らしい暮らしに近づけるように努めている。	一人ひとりの思いや意向を家族から聞き取ったり、日々の利用者との関わりの中での言動や表情を見逃さないよう努めている。例えば、健康上の問題が無く「しんどそうな表情」をしているのは「かまってほしい」のではないかと職員で話し合い、利用者の気持ちを察してまめに声かけをする等本人の立場に立って支援している。		
24			これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	センター方式のシートを利用し、入所前には家族の方に基本情報・暮らしの情報などを記入して頂き、入所時には、職員がその人の生活歴を把握できるように努めている。			
25			暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	前項目と同じセンター方式を利用しながら、一人ひとりの生活リズムを把握し、現在の残存能力を考えながら、ADLの低下を防ぐように努めている。			
26	(13)		チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	プラン作成時には、本人の日常生活の中から望まれているであろうということを察しながら、また家族の方には来訪時に必ず要望をお聞きし、作成している。	本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について検討するため、順次センター方式を導入している。本人・家族の希望や意向を採り入れながら、リハビリ関係者やかかりつけ医等の意見等を反映させ、概ね6ヶ月毎に介護計画を作成している。入院等利用者の状況や家族の意向等が変化した時は、期間に関係なく現状に即した新たな計画に見直している。また、毎月全利用者について目標の達成度や今後の対応等の検討を行い、「モニタリング記録表」に記録として残し次の計画につなげている。		
27			個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	ケース記録・チェック表・申し送りなどで情報を共有し、職員全員が把握できるようにし、気になる事があるときは、担当職員 ケアマネ ケア会議で全員で見直している。			

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28			一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	医療連携の看護師により、主治医と密に報告・連絡・相談がとれ、併設の医療機関において、処置・受診が素早くでき、家族の方にも安心して頂いている。		
29			地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	警察・消防署に定期的に挨拶に出向き、協力を依頼している。また、学生の実習も受け入れている。		
30	(14)		かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	本人・家族の意向を尊重しつつ、事業所の主治医の他、以前からのかかりつけ医での受診も継続できるように支援している。	本人・家族の希望により、入居後、かかりつけ医は協力医療機関の医師となっている。歯科・皮膚科・耳鼻科等は以前からの医療機関で受診しており、事業所が通院介助を行っている。受診結果については、管理者から家族に報告し情報を共有している。	
31			看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	医療連携加算により、24時間対応で報告・連絡・相談ができるようにしている。また、一人ひとりの健康管理や医療的な支援を行っている。		
32	(15)		入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院された時も面会に行き経過を記録している。また、入院先に主治医からも随時、報告を受け、早期退院に向けて、家族とも常に連絡をとっている。	利用者入院時には「介護サマリー」を医療機関に提供し、事業所での生活状況等入院時における本人の支援方法に関する情報の提供を行っている。今のところ、入院先は協力医療機関であるので毎日見舞いに行き、入院によるダメージを防ぎ、安心しての受療と早期の退院に向けて病院関係者と話し合っている。	
33	(16)		重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化・終末期については、安心して過ごして頂けるように入所時に家族に説明し、同意も得ている。	契約時に重度化した場合や終末期のあり方について、「重度化した場合における指針」で事業所が対応し得る支援方法の説明を行っており、早い段階から本人・家族等の意向や希望等の確認を行っている。	
34			急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	併設の病院内において定期的に開催されている勉強会や消防署の救急蘇生法やAEDの講習をうけている。		

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(17)	災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	事業所内で訓練に参加している。また、運営推進会議開催時には、地域や市町村の方々にも協力依頼を行っている。	事業所開設以来法人医療機関と合同で、消火器の使い方・避難誘導等の訓練を2回実施した。また、運営推進会議を通じて、地域住民に災害時の協力依頼を行い、非常用食料は隣接医療機関に共同備蓄すると共に、西播磨地区給食設備協議会に加入し、バックアップ体制を整備している。しかし、訓練に参加していない職員の中には利用者の避難誘導に不安を感じている職員もいる。	事業所内の避難経路が複雑であることも踏まえ、機会ある毎に事業所の状況を職員で話し合い、事業所独自のより実践的な訓練の実施等で、全ての職員が利用者を実際に避難誘導できる方法を身につけておくことが期待される。また、訓練の結果から抽出された課題等を踏まえ、より実践的なマニュアルづくりを検討してはどうか。
その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(18)	一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	個人情報の取り扱いには十分に注意を払い、本人の誇りを傷つけないように、一人ひとりの状況に応じた声掛けをしている。	利用者一人ひとりの感受性や価値観が異なるので、本人の誇りやプライバシーを損ねていないか一人ひとりのその場の状況に応じて話し合っている。利用者に声かけをする時も「ゆっくり」と「だらだら」は違うことを意識して対応している。「たより」は文面は同じでも、利用者本人の写真を掲載したものを家族に送っている。たよりの事業所内掲示や病棟発表会での写真等の使用については、同意を得ている。個人記録類は鍵のかかる事務所内ボックスに保管している。	
37		利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	具体的な自己決定や希望・要望などを生活の中に取り入れていけるように、本人の状況に応じたアプローチの仕方を工夫している。		
38		日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	就寝・起床等の時間を一律にせず、その日のペースや体調・能力に応じた声掛けを行っている。		
39		身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	訪問の理・美容を利用し、ホーム内で安価で実施している為、利用される頻度を多く、喜ばれている。また、外出時には、洋服を職員と笑いながら選んでいる。		
40	(19)	食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	職員と一緒に買い物・準備・片付け・下膳など個々の能力に応じた役割が定着している。食事メニューも毎日入居者と買い物に行っているため入居者との会話の中で食べたい物があれば変更し、柔軟に対応している。	食事のバランスを考慮し、「肉か」「魚か」等は職員が決め、食材の買出しに利用者と共にいった時に、「どの魚にするか」「どの野菜にするか」等利用者の意向や希望等を聞いている。利用者が、てんぶら用の海老の皮むき・てんぶらを揚げる・片づけを手伝う・包丁を研ぐ等利用者一人ひとりの好みや力を活かした支援を行っている。時には手づくりの弁当を持参して近くの公園で食事を楽しんでいる。また、職員も同じ食卓を囲んで利用者と共に同じ食事を楽しんでいる。	

自己	者	第三	項目	自己評価	外部評価	
				実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
41			栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事摂取量・水分摂取量は毎日チェック表に記入し栄養状態の観察や脱水状態が起こらないように支援している。また、献立を栄養士にチェックしてもらい、バランスのとれた食事に心掛けている。		
42			口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後の歯磨きの声掛けを行っているが、習慣付けができていない。		
43	(20)		排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	個々の排泄パターンを掴める様にチェック表を作成し、声掛け・誘導を行っている。また、容易なおむつの使用にならないように努めている。	排泄チェック表を活用して、一人ひとりの排泄パターンを把握し、タイミングよい声かけで可能な限りトイレでの排泄を大切に支援を行い、安易なおむつ使用にならないよう取り組んでいる。紙パンツを使用していた人にも前誘導等排泄の自立支援を行い、昼間は排泄の自立が確保されると共に、経済的負担を大きく軽減できた利用者もいる。失禁時等はさりげなく声かけを行い、居室での更衣・交換等を行って利用者の不安や羞恥心を軽減するための配慮を行っている。	
44			便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	食事摂取量・水分摂取量を毎日チェックし、食材の工夫・散歩・体操を取り入れることで自然な排便ができるように取り組んでいる。		
45	(21)		入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	利用者の希望を確認しながら、入浴していただいている。2人で一緒に入られる方や入浴剤を利用される方やさまざまである。	基本的には週3回以上の入浴としているが、希望により毎日入浴、時間は午前中から夜8時ごろまでと利用者の生活習慣や意向を尊重した個々に沿った入浴支援を行っている。また、好みにより入浴剤を使用している。個浴を基本とし、機械浴が必要な時は3階の協力医療機関のものを使用できる。入浴に金銭的な負担がかかると思いい入浴を拒む人等もあるが、金銭負担がないことを説明し、脱衣場までさりげなく誘導する等拒む理由に応じた支援を行っている。また、同性介助を行っている。	
46			安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	生活のリズムを大切にしながら、本人が身体を休めたい時にいつでも休息して頂いている。		
47			服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	薬剤師による「服薬表」を作成し、職員が薬の効能・副作用などを把握・確認できるようにしている。また、定例薬の変更や臨時薬においては業務日誌の申し送りにて職員全員が目を通すようにしている。		

自己	者 第三	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
48		役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	レクレーションよりも生活の中で料理・裁縫など職員と話をしながら、楽しく・満足感を感じられるように支援している。		
49	(22)	日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	利用者と職員での買い物・散歩など日常的な外出が多く、個々の希望にはなかなか沿えていない。	毎日の食材の買出しや、冬季でも利用者への健康面にも配慮しながら、近くの海岸辺りへ散歩等に出かけている。屋外へは車イスが必要な人も、他の利用者と共に戸外に出かけられるよう支援している。車を利用してのドライブや案山子祭り・コスモス畑の見学等にも出かけている。利用者の希望に沿った普段行けないような場所へのバス旅行等を家族やボランティアの協力を得ながら実施する計画がある。	
50		お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	財布を持たれている方は、外出時の買い物・外食の際にはご自分で支払っていただいている。		
51		電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	利用者からの要望があれば、行っている。		
52	(23)	居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	居間・廊下・各居室の室温・温度・日差しにも配慮している。季節感を自然に感じられる雰囲気づくりに努めている。	食堂・居間等には自然の光が差し込み、温度等にも不快感等を与えないよう配慮している。玄関ドアには節分の鬼が飾ってあり、台所からはてんぷらの準備の音、揚げる臭い等季節感や生活感があり、居心地良く暮らせるよう工夫している。	
53		共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	居間において、それぞれ自分の落ち着く居場所を作っておられ、安心感に繋がっているようである。		
54	(24)	居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	テレビや仏壇など、本人が以前使われていた物を自由に持ち込んで頂き、今までの生活スタイルが少しでも維持できるように努めている。	ベッドとタンスは事業所が準備したものであるが、家族の写真・仏壇・テレビ・時計等利用者が使い慣れたものや馴染みのものが持ち込まれ、利用者が落ち着いて暮らせるよう配慮している。	
55		一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	個々に応じたコミュニケーションをとり、自分のペースで考え、決定して生活が出来るように支援している。		